

都状から読み取る泰山府君の神格

——『朝野群載』と『台記』を中心に——

プレモセリ・ジヨルジヨ

〔抄録〕

従来の研究では、泰山府君は病氣治療や延命長寿から昇進や栄達といった現世利益の神として言われていた。さらに、最新の研究では、泰山府君は陰陽道諸神とともに、仏菩薩の変化・垂下とする顕密仏教の世界観のなかにあり、その秩序に組み込まれる存在として指摘された。しかし、このように描かれた陰陽道では、仏教を補完する信仰として存在しており、独自の世界観を持っていないように捉えられた。本論はこういった問題意識から出発し、『朝野群載』永承五年（一〇五〇）成立の都状と『台記』康治二年（一一四三）成立の都状に焦点を当てながら、泰山府君祭の生

成と展開を分析した。その結果、泰山府君は、十世紀末に密教儀礼を取り組んだ上で、はじめて陰陽道神として生成したことがわかった。さらに、陰陽道は密教と競合することで、院政期において独自の世界観を維持しようとしたことを指摘した。その世界観では、泰山府君は顕密仏教の一環を担う存在には解消できない神格であった。

キーワード 陰陽道、泰山府君、都状、台記、祭祀、泰山府君祭

はじめに

陰陽道の研究は二つの時期に分けることができる。まず、一九八〇年代初期では、村山修一¹による『日本陰陽道史総説』では、村山は古代から近世までの陰陽道の展開を総括にまとめ、陰陽道のことを「古

代中国に起こった陰陽五行説を中心とする思想とそれに基づく諸技術」と述べた。このように、陰陽道は中国に起源し、奈良時代に日本に導入されたと考えられていた。村山の論説は、一九九〇年代初期に出版された『陰陽道叢書』における小坂真二と山下克明²などに否定される。小坂は、陰陽道の成立には密教の影響が不可欠であったことを

指摘し、山下は「陰陽道」という用語は中国と朝鮮半島にはみられず、陰陽道という呪術宗教は九世紀末期から十世紀にかけて日本で成立したと述べた。山下はさらに、平安初期頃の律令制下に成立した陰陽寮に官職をつとめた「陰陽師」の職務が律令制に規定された枠からはみ出し、「祭祀」の領域に拡大したことを指摘した。これにより、平安中期に、陰陽寮の官職名をさす「陰陽師」とは別に、一種の職業的宗教者として「陰陽師」の名称が社会的に通用していく。このように、平安中期に職業的宗教者としての陰陽師を中心に成立して発展したが、「陰陽道」という呪術宗教だった。

もっとも最新の研究では、二〇一五年に出版された『平安時代陰陽道史研究』^⑤においては、山下は、安倍泰親が閻魔天も泰山府君も司命・司禄もみな星の変化、つまり星の垂下神と見ていたことや、『陰陽道旧記抄』には日月星辰の本地は仏菩薩と位置付けられることから、陰陽道の神々のことを「仏菩薩の変化・垂下とする顕密仏教の世界観の中にある」とした。それが「陰陽師は独自の世界観、来世観を持つことはなかった。陰陽道の信仰は、究極的には顕密仏教のコスモロジーの枠中に位置付けられていた」からであると指摘する。陰陽道を顕密仏教の一環であると捉えることで、陰陽道は孤立した信仰ではなく、神信仰のようにもつと広い宗教的ネットワークの中にあり、古代・中世における宗教世界を理解するのに陰陽道を研究することは不可欠であるという可能性が開かれた。しかし、「顕密仏教」という研究テーマは古代・中世の宗教世界を広い視野から把握するのに重要な立場でありながら、必ずしも欠点がないわけではない。平雅行^⑥、末木文美士^⑦、

佐藤弘夫^⑧は、顕密仏教が仏教以外の信仰を副次的に捉えるという問題性を指摘する。言い換えると、「顕密仏教」という立場から陰陽道を検討すると、陰陽道独自の世界観が見て取れないのではないかという問題が生じる。

論者は以前、泰山府君が『今昔物語集』の中でいかに描かれており、古記録から泰山府君祭の記録に焦点を当てた。さらに、都状から泰山府君はいかなる陰陽道神であったかを検討してきた。結果、『台記』に見える都状の中では、泰山府君が「冥道諸神十二座」の「十二冥道の尊長」として新たに位置づけられる展開は、『今昔物語集』や古記録にはみえないことを指摘した^⑨。本論では、改めて泰山府君祭の儀礼テキスト「都状」を中心に、『朝野群載』と『台記』に焦点を当てながら、陰陽道の世界観はいかに展開するかを検討していきたい。

一章 泰山府君祭の成立と都状

一節 泰山府君祭の生成過程

日本における泰山府君は、すでに藤原忠平の日記『貞信公記』延喜十九年（九一八）五月条にみえる「七献上章祭」の中で確認できる。そこでは、「七献上章祭」とは、延命を祈る陰陽道儀礼で、その中で「七献」の神、すなわち「司命・司禄・本命・天官・地官・水官・泰山府君」という冥府の神々が祭られていた^⑩。陰陽道の祭祀の中で、天地の自然を神格化した道教的な神と冥官を祭る道教神系の祭祀として分類されている^⑪。このように、すでに一〇世紀初期段階ですでに泰山府君の信仰が確認できる。ただし、「七献上章祭」における泰山府君

は、あくまで「七献」の一神にすぎず、中心的な神格ではなかったのである。延喜十九年以降の記録では、「七献上章祭」は見られないが、鎌倉初期成立の『伊呂波字類抄』太諸社や室町後期に成立した賀茂家の祭祀集成『文肝抄』に、泰山府君祭の別名として挙げられていることから、泰山府君祭の背景に「七献上章祭」があったことがうかがえる。実際に、『朝野群載』永久二年（一一一四）にさかのぼる藤原為隆の都状の中で泰山府君祭に祀られる「冥道諸神十二座」の神々が確認できる。それらは、「五道大神・泰山府君・天官・地官・水官・司命・司禄・本命・同路將軍・土地靈祇・永視大人」であった。傍線が示すように、七献上章祭に見られる「七献」の神々は泰山府君祭でも祀られていたことから、泰山府君祭の成立に七献上章祭が不可欠であったことがわかる。では、それ以降、泰山府君はいかに祭られたか。泰山府君を中心した神格として祭ったのは「泰山府君祭」である。その祭祀のもっとも早い記録は、十世紀末期にさかのぼる『小右記』永祚元年（九八九）二月十日の記事にある。そこでは、安倍晴明が一条天皇のために泰山府君祭を行い、一条天皇の病気を治療するように泰山府君に祈願したものである¹²。以下、原文を取り上げる。

十日 辛酉、速朝退出、依喚参院、尊勝御修法・焰魔天供・代厄御祭等奏事由可令奉仕者、日来奉為公家自他夢想不亘、仍所示仰也者、即罷出、未時許内藏寮権曹司焼亡、下人焼死云々、沉病者云々、十一日 壬戌、参内、皇太后宮俄有惱御、摂政被馳参、昨日院仰事今日申摂政、令勘申尊勝法・太山府君祭曰、御修法事□遣天台座主許、

御祭□晴明奉仕、曉頭罷出、今夜於南庭祈申南山、是身上事也（永祚元年二月）¹³

以上の記事を見ると、十日に藤原実資が円融法皇から、一条天皇に関わる夢想がよろしくないと聞き、「尊勝御修法」・「焰魔天供」・「代厄御祭」の執行を奏上した。そして、十一日に参内して、摂政・藤原兼家に十日のことを伝え、「尊勝法」と「太（＝泰）山府君祭」を行うように申し上げた。その場で御修法＝尊勝法は天台座主（尋禪、藤原原師輔の子）と御祭＝泰山府君祭は安倍晴明が執行することになったことも見て取れる。ここで、「泰山府君祭」は「尊勝法」とともに十一日に行われるが、前日の記録を見ると、「泰山府君祭」は記されていないことが注目される。十日の記録から、「尊勝御修法」・「焰魔天供」・「代厄祭」が行われる予定だったことが確認できる。「尊勝法」・「焰魔天供」はそれぞれ密教儀礼で、「代厄祭」は陰陽道儀礼であった。代厄祭とは人形に依頼人の厄を移し河原に流して祓う祭祀に対して、尊勝法は滅罪・除病を目的とし、焰魔天供では、死籍を削ってもらふよう祈願がなされた密教儀礼である。この三つの儀礼はそれぞれ個人の運命と関わる祭祀であったことがうかがえる。では、なぜ十一日に代厄祭と焰魔天供がなくなったのだろうか。実は、焰魔天供の修法を説く唐代密教の次第書『焰羅王供行法次第』に次の文章が見られる。

乞王削死籍付生籍。到疫病之家。多誦大山府君咒¹⁴

以上では、延命長寿を祈願する際に、密教の世界観における冥府の最高位に立つ焰羅王に死籍を削って、生籍に寿命を書き換えられた。そのため、病人の家では多く泰山府君に向かって呪文を唱えた。すなわち、焰羅王供を説く次第書では、焰羅王に直接的に祈願がなされたのではなく、その「中継ぎ」にある泰山府君に祈願がなされたことがわかる。¹⁵『小右記』に見られる泰山府君祭は焰羅王信仰を踏まえた上で作り上げられたのである。¹⁶このように、焰羅王より泰山府君に祈る方が効果的だと考える発想がうかがえよう。そして、『小右記』の記事から、泰山府君祭を新しい陰陽道祭祀として作り上げたのは、安倍晴明であったことが推定できよう。¹⁷

以上、『小右記』の記事から泰山府君祭の生成過程を踏まえてきたが、次はその儀礼に必要な不可欠であった都状の分析を行いたい。

二節 平安時代における都状の残存状況

泰山府君祭は古記録では頻繁に見られるが、その真相や目的などを検討するのに、都状を見る必要がある。祭祀を行う際に、その願意と供物などを示すのは都状であり、主に冥府の神々に向けて書かれたものは「都状」と呼ぶ。梅田千尋¹⁸によると、「都状」は「全ての状」を指し、冥道十二神の献物全体を示す語であるという。『陰陽道旧記抄』に収録される承元三年七月十五日（一一〇九）の「道普泰山府君都状」では、冥道十二神の供物全体と個別の神格への供物の二種の様態が書かれていることがその裏づけているという。また、梅田の研究によると、都状は祭祀の願主が署名を直筆し十二神に直接呼びかけたも

のに対し、祭文は陰陽師の立場から書かれたものであった。さらに、『文肝抄』では泰山府君祭の項目には都状のことは「棚に置いて読まず」とあることから、祭祀の時に唱えられた祭文に対して、都状は唱えられるものではなく、十二神に献上されるものであったことが明らかにになった。さらに、『祭文部類』では、都状は冥道の神々を中心に行われた泰山府君祭や天曹地府祭には限定されておらず、三万六千神祭も土公祭にも書かれたことから、これまで「都状」は冥道の神々に向けて書かれた祭文であるという説が書き換えられた。では、平安期にさかのぼる都状はいかなるものであったか。今日まで現存している平安期に作られた都状は、以下のように整理することができる。

- ① 『朝野群載』¹⁹ 永承五年（一〇五〇）、後冷泉天皇の病氣平癒の為
- ② 『三十五文集』²⁰ 承保四年（一〇七七）、藤原伊房の娘の病氣平癒の為
- ③ 『朝野群載』²¹ 永久二年（一一一四）、藤原為隆の病氣平癒の為
- ④ 『本朝統文粹』²² 保延四年（一一三八）、藤原実行の延命・昇進の為
- ⑤ 『台記』²³ 康治二年（一一四三）、藤原頼長が『周易』を学ぶ際に凶を予防する為
- ⑥ 『三十五文集』²⁴ 永万元年（一一六五）、藤原兼実の病氣平癒の為

以上から、十一世紀半ばから十二世紀末にかけて総合六通の都状が現存していることが確認できる。極めて少ない数だが、本稿は、その中から初見と見られる①の都状と、泰山府君の変貌を象徴する⑤の都

状、二通を中心に考察を進めたい。

二章 『朝野群載』における泰山府君祭都状

では、まず『朝野群載』永承五年の都状に注目したい。以下、原文を載せる。

後冷泉天皇泰山府君都状

謹上 泰山府君都状

南閭浮州大日本国天子親仁御筆年廿六 献上 冥道諸神一十二座一銀錢二百四十貫文 白絹一百二十疋 鞍馬一十二疋 勇奴三十六人 右親仁御筆。謹啓泰山府君冥道諸神等。御踐祚之後。未_レ経_二幾年_一。而頃日蒼天為_レ変。黄地致_レ妖。物恠数々。夢想紛々。司天陰陽。勘奏不_レ輕。其微尤重。若非_レ蒙_二冥道之恩助_一。何攘_二人間之凶厄_一哉。仍為_下攘_二禍胎於未萌_一。保_二宝祚於将来_一。敬設_二礼奠_一。謹献_二諸神_一。昔日崔夷希之祈_二東岳_一。延_二九十之算_一。趙頑子之奠_二中林_一。授_二八百之祚_一。古今雖_レ異。精誠惟同。伏願。垂_二彼玄鑒_一。答_二此丹祈_一。拂_二除灾厄_一。将_レ保_二宝祚_一。刪_二死籍於北宮_一。録_二生名於南簡_一。延_二年増_一算。長生久視。親仁御筆謹啓。

永承五年十月十八日

天子親仁御筆謹状

（『朝野群載』）永承五年（一〇五〇年）⁽²⁵⁾

以上の都状の形式から分析すると、まず祈願者の名前と年齢（多くの場合は、本命と行年も記された）が書かれており、その後は冥道諸

神十二座に献上する供物が記されている。その中で、白い絹のほかに紙でできた銀錢・鞍馬・勇奴がある。このような形式はほかの都状にも共通しており、定められていたと考えられる。次に、都状の「本文」といえるものが始まり、そこで泰山府君祭が行う事情と目的がうかがえられる。以上の都状では、後冷泉天皇自身が泰山府君、冥道の諸神たちに都状を謹んで申し上げる。後冷泉天皇がまだ即位してから間もないのに、天変・地変が起きて、物怪が数々現れて、夢想もよろしくない。また陰陽寮の卜占などもみな悪い徴を示している。ここで冥府の神である泰山府君の助けを蒙らなければ、とても災厄を祓うことはできない。災いを未然に防ぎ、天皇の寿命を将来に保つために、敬意を表して、冥府の諸神に供え物を奉る。この祈りに応えて、北宮にある死者としての戸籍を削り、南簡にある生者としての戸籍に再登録し、延命長寿のことを謹んでお願い申し上げる。といった内容である。

後冷泉天皇の都状から、二十六歳の天皇のために寿命を延ばして、災厄を防ぐように祈願がなされた。さらに、ここで注目されるのは、「死籍を北宮より削り、生名を南簡に録し」のように、「北宮」にある死籍を削り、「南簡」にある生籍に付けるという、具体的に寿命がいかに延長されるかが記されていることである。ここで、泰山の頂上に寿命の帳簿が保管されているという発想が背景にあつたのであろう。実際に、東晋成立の志怪書『搜神記』を見ると、寿命を延ばしてもらう際に「死」を司る「北斗」と「生」を司る「南斗」に祈願がなされたことを語る説話を見ることが、泰山府君祭は星辰信仰を前提に作り

上げられたものであるということがうかがえよう。⁽²⁶⁾ 実際に、泰山府君は他に「本命祭」に祭られる天曹地府に含まれ、また依頼人の本命日の際に泰山府君祭が行われたというように、星辰信仰と深く関係を持っていたのである。『朝野群載』の都状では、寿命の帳簿を保管する「地上」の場所としての泰山と、北斗・南斗と結びつけらる「天上」の神・泰山府君が描かれている世界観が表現されているのであろう。では、次に『台記』にみられる都状をみていこう。

三章 『台記』における泰山府君祭都状

一節 『台記』 康治二年十二月七日条の記録

左大臣藤原頼長（一一二〇～五六）の日記『台記』に、頼長は非常な熱意をもって故実典礼を習得することにとめ、しばしば儀式の詳細な記録を書きとめている。また頼長は経学を中心に深い学問を修めたが、その学問の様子や学殖のほどをうかがわせる記事も少なくない。頼長自身は、保延二年（一一三六）には十七歳で内大臣に昇って世人を驚かせ、一方、父忠実が頼長の才学と公事に精励する姿をみて、摂関家の再興を頼長に期待したなど、院政期において注目すべき存在である。その日記『台記』 康治二年十二月七日の条に、頼長が安倍泰親に泰山府君祭を行わせる記録とその都状が知らされている。以下、原文を載せる。

藤原頼長都状

康治二年十二月

十二月大乙巳

七日、丑巳、雪降、成通卿許送馬、依下向伊勢也、吾欲学周易之、且是所以、可与明年甲子革命之議也、而俗人伝云、学此書者有凶云々、又云、五十後可学云々、余案之、此事更无所見、如論語皇侃疏者、少年可学之由所見也、然而猶恐俗語、因之使泰親祭代山府君、去三日欲祭、依雨延引、今日又天陰雪、秉燭後束帶向川原、乘人車參祭儀、于時雪頻降、乍車斃立川原、請府君曰、学易極天地之理者是正道也、鬼始也者邪心也、邪勝正者非天之心、豈難鬼始之学易者可致其凶乎、雖不祈請、天可降灾、可況祈請哉、頃之天快晴、月星見、天与善謂哉、此言善、謂学易一辺、非謂我是善人也、雪猶少下、然而余下車就坐、泰親祭之、不経程雪止、祭了帰宅、召泰親賜衣、依天晴也、改着淨衣拝畢、依恒例也、都状成佐作之、載左、

謹上 泰山府君都状

南瞻部州日本国内大臣正二位藤原朝臣某年

本命

行年

献上冥道諸神一十二座

右某、謹啓泰山府君冥道諸神等、夫府君者十二冥道之尊長也、司命司録、耀光於上天、白籍黒籍、記事於東岳、禍福唯依信与不信、寿夭又^(折ノ下与不折ノ三文字脱カ)在^(職イ)祈^(者カ)、被^(重イ)精誠立^(者カ)、乘感応者欤、某謬在弱冠之齡、早忝輔展之^(職イ)、緘、器量疎兮備台鼎、塩梅之味无調、材幹短兮居星階、柱石之用難協、縦受余慶於累祖蹤、争鎖積毀於衆人之口、夫忠孝之道、披典籍以乃見焉、礼讓之儀、待文章以後顯矣、古典云、君子若欲化民成

俗、其必由学乎、玉不琢不成器、人不学不知道、盖此謂也、是以為収
眩官之責、為勵奉公之誠、專志於九經、竭力於六芸、性縱愚魯、学古
思齊而已、俗諺云、易多忌諱、学者之仁可畏也、又云、五十以後可学
此書、而明年甲子当革命否、雖為瓊才之身、可開群議之序、革命之
起出自周易、若不窺此書者、何以陣其趣、若又披此書者、恐不免其微、
然而俗人之諺未識所由、始学以事君父、則天須与善、嗜道以弁礼对、
亦神盡幸謙、從幼学之齒、縱讀此書、到知命之年、将究其理、何必
待五旬之算、徒可枕一經之勤、新知人凶、誠非書凶、但唯云陰陽
被之方也、易迷者然微之境也、不知蒙冥道之加被、破厲階於
未然、加之明年之曆相当重厄、弥致謹慎、将弘禍患、是故敬尊如在
之礼、聊設惟馨之奠、易有明信、神其捨諸、縱有妖怪之可来、翻為
福祐、縱有運命之可被、氣便寿算、伏乞玄鑒、必答丹祈、謹啓、

日本国康治二年十二月七日

内大臣正二位藤原朝臣某謹

啓

〔『台記』〕康治二年十二月（一二四三年）⁽²⁷⁾

以上の記事は、記録と都状の部分に二つにわけられている。記録の
部分では、頼長は明年が甲子革命に相当し、朝廷で仗儀が開催される
ので、これについて学びたいと藤原成佐に相談すると、これは『周
易』から出た説であるから『周易』を学ばないと理解できないと教え
られ、そこで頼長は『周易』を学ぶ決意をする。ところが、世間では
『周易』を学ぶ者は凶あり、あるいは五十歳以後学ぶべきだと言ひ伝
えられている。頼長はその説に対して、根拠がないこと、また皇侃⁽³²⁾
が記した『論語義疏』のように少年の頃に学ぶべきであると意義を唱

えるが、やはり俗語を恐れ、泰親に泰山府君祭を頼む。続く三日間は
雨のせいで祭祀が遅れるが、雪の日に川原に向かい泰山府君に『周
易』を学ぶことは天地の理を極めるための正道であることを請う。そ
の上、正道を学ぶのにどうして凶事があるかと申し上げて、神の加
護を求める。ちょうどその時に、天氣が晴れ、月星が輝いて見えてき
て、頼長は神の感応と捉え、泰親に泰山府君祭を行わせる。最後に、
記録に続き、成佐が作った都状をつけるという内容である。なお、翌
日（八日）の記事から藤原成佐について『周易』を読み始めたことが
知られる。

『台記』において、康治年間（一二四二～一二四四）から久安年間
（一二四五～一二五二）にかけては、頼長の勉学に関する記事が特に
多くある。康治二年七月二日から『左伝』を始め、以後学者たちを
集めて学習講論を継続的に行っており、講論では、『春秋左氏伝』『礼
記』『周礼』『儀礼』『尚書』『周易』『論語』などを重視していたこと
は指摘されている⁽³⁴⁾。その学者の中でも、頼長が特に藤原成佐を尊重し
た姿勢は、成佐が病気で亡くなる前後でも顕著に見られる。久安六年
十一月五日に頼長は使いを送り、成佐を見舞わせ、同七日には病床の
成佐を救うために安倍泰親に泰山府君祭を祀らせている。この時、都
状に頼長の名を書くべきであったが、同月五日に亡くなった祖母藤原
全子の喪に服していたため、成佐の名を書いたというエピソードもあ
る⁽³⁵⁾。頼長の側近に第一者の賀茂家栄・憲栄・守憲・宗憲らが仕えてい
たが、頼長は彼ら以上に安倍泰親を尊重していた。安倍氏嫡流として
後に第一者に昇る泰親は、この時点では従五位上主計助にすぎなかつ

たが、『台記』久安四年七月二十九日条に頼長が「凡泰親占勝^二其父^一者也、又仰^レ之陰陽書云、占十而中七為^レ神、泰親之占十之七八中、又其中不^レ仰^二他人^一、不^レ恥^二上古^一事也」と、泰親の優れた占いの才能を賞賛している。ところが、『平家物語』に泰親が「指すの神子」と掌を指すように占いがよく当たるいうように称されることは共通するといえよう。頼長が泰親と緊密な関係を結んだことが明らかである。その関係は泰親の出世にも影響を与えたことというまでもない。泰親は陰陽寮のトップに立ったのは晩年のわずかな年数で、それは頼長にとくに重用され、保元の乱で頼長が滅んだことも一因と考えられている³⁷。記録上で、頼長という「理」や「正道」と言った価値観は、経学を通して摂取し、自らの行為規範としていた。頼長は経書の知識と思想を受容し、孔子を理想とする政治を志し、現実の政治で実践しようとしていたことが、以上の記録の背景にあった³⁸。この価値観は、都状の部分にも見出される³⁹。

二節 『台記』康治二年十二月七日条の泰山府君祭都状

右某、謹みて泰山府君冥道諸神等に啓す。夫れ府君は十二冥道の尊長なり。司命司録は、上天に光を耀かし、白籍黒籍⁴⁰の、東岳に事を記す。禍福は唯だ信と不信とに依る。寿夭は又祈りなり。若し精誠を致さば、感応を垂るるものか。某謬りて弱冠⁴¹の齡に在り、早く忝くも辰の職に輔す⁴²。器量疎くして台鼎を備へ、塩梅の味調ふこと無し。材幹短くして星階に居り、柱石の用協ふこと難し。縦ひ余慶を累祖の蹤に受くるとも、争でか積毀を衆人の口に鎖がむか。夫れ忠孝の道は、典

籍を以て乃見を披き、礼讓の儀は、文章を以て後頭を待つ。古典に云はく、君子若し民を化し俗を成さむと欲へば、其れ必ず学に由るか。玉琢かざれば器成らず、人学ばざれば道知らず、とは、盖し此の謂ひなり。是を以て眩官⁴³の責を収めむが為、奉公の誠を励まさむが為、九経⁴⁴を専志し、六芸⁴⁵を竭力す。性縦ひ愚魯なれども、古を学び齊しからむことを思ふのみ⁴⁶。俗諺に云はく。易は忌諱多し。学ぶ者の仁を畏むべし、と。又云はく。五十以後に此の書を学ぶべし、と。而して明年甲子革命に当たるや否や。瑣才の身たると雖も、群議の席に関かるべし。革命の起こりは周易より出づ。若し此の書を窺はざれば、何をか以て其の趣を陣へむ。若し又此の書を披かれば、其の微免れざる恐れあり。然して俗人の諺未だ由る所を識らず。始学を以て君父に事へ、則ち天須らく善を与ふ。嗜道を以て弁礼に対へ、亦神盡く謙を幸ふ。幼学⁴⁷の齡より、縦ひ此の書を読めども、知命の年に至り、將に其の理を究めむとす。何ぞ必ず五旬の算を待ちて、徒らに一經の勤めを抛つべきや。斯く人凶を知るに、誠の書凶に非ず。但だ知り難き者は陰陽の方なり。迷ひ易き者は然微の境なり。冥道の加被を蒙ること知らず、厲階を未然に破る。加ふるに明年の暦は相当の重厄なり。弥々謹慎を致し、將に禍患を払はむとす。是の故に敬みて如在⁴⁸の礼を尊び、聊か惟れ馨しき奠を設く。苟も明信⁴⁹有らば、神其れ諸れを捨てむや。縦ひ妖怪の来たるべく有れども、翻りて福祐と為り、縦ひ運命の被るべく有れども、気寿算を便りとす。伏して玄鑒を乞ふ、必ず丹祈に答へむことを、謹みて啓す。

都状の部分では、「十二冥道の尊長」なる泰山府君や冥道諸神に祈願がなされている。そこでは、司命司録は天に輝いて、東岳泰山に死籍と生籍のことを記すので、人の福と災い、またその長寿と若死には冥道諸神に祈ることによるものであることが説かれている。そのため、まごころをもって祈れば、必ず神が応えてくれるといった序文である。続いて、頼長の来歴についての文章が置かれている。「謬りて弱冠

の齡に在り」から「争でか積毀を衆人の口に鎖がむか」まで、頼長は十一歳で元服し、内裏の昇殿を許されていたことや、早く内大臣に昇進し、国家を支える立場にいるにも関わらず、その腕前と才能が足りないことが強調されている。そこでは、頼長が「古典に云く」に続いて、『礼記^①』の中の「学記」を直接的に引用し、「君子は若し民を化し俗を成さんと欲せば、それ必ず学によるか。玉琢かざれば器と成らず、人学ばざれば道を知らず」とする。言い換えると、「君主が、もし人民を感化し、美しい気風を作り上げようと望むならば、それこそ必ず学問（および教育）によらねばなるまい。玉も琢を経なければ有用の器物とならぬように、人も学問によらないと道はわからない」とすること、朝廷に仕えるために『周易』を含む経書を学ぶ必要性と正当性を主張する。また、『礼記』の引用に続いて、頼長が世間で『周易』を学ぶことは凶を招くことと、五十歳以後に学ぶべきとする言い伝えには根拠がないことと、甲子革命を検討する朝廷の議論に参加し、革命に伴う徴を『周易』を学ばなければ読み解くことができないことを唱える。

都状の末尾では、「是の故に敬みて如在の礼を尊び」から「苟も明

信有らば」まで、頼長が改めて経書を尊重し、『論語』八佾、『尚書』君陣、『春秋左氏伝』隱公三年伝の言葉を引用し、神を祭る時はあたかも神がそこに居るかのようになり敬い、明德をもって神を感じさせるような祭祀（泰山府君祭）の様子を表現し、たとえ明らかでない信があれば、どのような粗末なものでも神に供えたりすると、神が応えてくれることを述べる。

以上の都状は、延命長寿や除病といった現世利益を求める都状のパターンを踏まえながらも、経学を通して、新たに政治的な力と結びつけられる都状として位置付けられる。これは、頼長が藤原摂関家の再興を志し、天皇を支える摂関として自分が最も適応する者であるという思考は背景にあることが考えられる。『台記』において頼長は、朝廷の議論に参加するために『周易』を学ぶ必要性を唱え、『周易』を学ぶ際に伴う凶から加護を求める。それに加えて、『周易』を学ばないと甲子革命に伴う重厄を避けることができないということから、この都状は頼長自身を守護するものだけでなく、朝廷・国家全体を守るためであることも見て取れよう。さらに、この話は『台記』に限定されず、橘成季編『古今著聞集』（一二五四年成立）文学編にも見られることから、平安末期の貴族日記から鎌倉初期の説話にまで広く伝えられたことが推定できるのである。

おわりに

本稿では、十一世紀と十二世紀に作られた泰山府君祭都状を通して、院政期における陰陽道の世界観はいかに展開するかを見てきた。安倍

晴明が開発した『小右記』に見られる泰山府君祭に近い『朝野群載』の都状から、泰山府君祭は星辰信仰と密教との関連が強く、延命長寿や病氣治療の性質が強調されたことが見て取れる。また、星辰信仰と結びつけられることによって、泰山府君は「地上」の神から「天上」の神として位置付けられることも指摘できよう。一方、『台記』では、頼長は経学の価値観を尊重し、『周易』を学習することに伴う凶から自己の守護と、甲子革命の災厄を予防することを祈願する。その祈願に応える泰山府君は星辰信仰を踏まえながらも、新たに政治的な力と結びつけられることで、国家を守るといった役割を獲得していく。また、都状の冒頭部分から、「それ府君は十二冥道の尊長なり」とあるように、泰山府君のことは「十二冥道」の「尊長」たる最も尊い神として位置付けられる。このようにレベルアップした泰山府君の生成過程には、安倍泰親がもつとも深く関わったキーパーソンであったと言える。泰親は晴明が開発した泰山府君祭を新たに位置づけ、陰陽道の独自の世界を展開させようとしたと考えられる。このような泰山府君祭は鎌倉時代ではいかに継承されたか、さらに検討する必要がある。『台記』の都状が示すように、陰陽道は普遍的で、一定した世界観を維持したのではなく、時代ごと、かつ時代の中でも、独自の世界観を展開していたのである。院政期は陰陽道にとつての重要な転換期であったことが『台記』の史料から読み解くことができる。こういった展開は、仏教の一部に解消されず、陰陽師が実践の現場で重視した都状が教えてくれるのである。

〔注〕

- (1) 村山修一『日本陰陽道史総説』、塙書房、一九八一
- (2) 村山修一「ほか」編、『陰陽道叢書』四冊、名著出版、一九九一・一九九三
- (3) 小坂真二「陰陽道の成立と展開」『古代史研究の最前線』四、雄山閣出版、一九八七も参照。
- (4) 山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』、岩田書院、一九九六も参照。
- (5) 山下克明『平安時代陰陽道史研究』思文閣、二〇一五、第一部、三章「陰陽道信仰の諸相―中世初期の貴族官人・都市民・陰陽師」と四章「密教修法と陰陽道」
- (6) 平雅行「黒田俊雄氏と顕密体制論」『歴史科学』第一三八、一九九四
- (7) 末木文美士「顕密体制論の再検討」、速水侑編『古代から中世への転換期における仏教の総合的研究―院政期を中心として』平成七年度科学研究費補助金（総合研究）研究成果報告書、一九九六
- (8) 佐藤弘夫「神仏習合と神祇不拝」『日本史研究』第五一一、二〇〇五
- (9) プレモセリ・ジョルジョ「陰陽道神・泰山府君の生成」『佛敎大学大学院紀要』第四二号、佛敎大学大学院、二〇一四
- (10) 小坂、前掲(3)
- (11) 山下克明、前傾(4)
- (12) 繁田信一『平安貴族と陰陽師：安倍晴明の歴史民俗学』吉川弘文館、二〇〇五
- (13) 『小右記』大日本古記録、岩波書店
- (14) 『焰羅王供行法次第』梵天火羅九曜、大正新脩大藏經二十一
- (15) 長部和雄「唐代密敎における閻羅王と太山府君」『唐宋密敎史論考』永田文昌堂、一九八二
- (16) 坂出祥伸「日本文化の中の道敎―泰山府君信仰を中心に―」、中村璋八博士古稀記念論集編集委員会編『東洋学論集：中村璋八博士古稀記念』、一九九六
- (17) 斎藤英喜『安倍晴明：陰陽の達者なり』ミネルヴァ書房、二〇〇四

(18) 梅田千尋「陰陽道祭文の位置―『祭文部類』を中心に―」斎藤英喜・井上隆弘編『神楽と祭文の中世』思文閣出版、二〇一六

(19) 『朝野群載』新訂増補・国史大系、吉川弘文館

(20) 『三十五文集』続群書類従、続群書類従完成会

(21) 『朝野群載』、前傾(19)

(22) 『本朝統文粹』国史大系、吉川弘文館

(23) 『台記』史料纂集、続群書類従完成会

(24) 『三十五文集』、前傾(20)

(25) 『朝野群載』、前傾(19)

(26) 速水侑『平安貴族社会と仏教』、吉川弘文館、一九七五

(27) 『台記』、前傾(23)

(28) 十千十二支の組合せによって、一番目となる甲子の年は、天命が革まり、王朝が交代する辛酉の年の四年後で、政令を革め、反乱が多いと言われた。それを防ぐために平安時代によりよく改元が行われた。

(29) 平安時代、朝廷における評議の制度。大臣以下の公卿が陣の座につき、政務に関する討議を行なったもの。議題は神事・即位・改元など朝儀関係から官吏の任免・叙位、民政・司法・立法・対外問題など、国政全般にわたった。出席者に意見を述べさせ、天皇・摂関が裁可した。院政時代以降、形骸化する。

(30) 左大臣冬嗣の男良世の末裔。頼長の身辺に見出す早い例は、保延五年六月四日の記事で、そこに漢詩制作の会に参列している。その後は師として常侍している。頼長に高才として評価される。久安六年十一月より病にかかると、頼長自ら見舞いに行く、仏事に祈禱させたなど平癒を願った。『尊卑分脈』から母側の叔父は賀茂家道言で、久安六年十二月二十九日に四十四歳で出家し、同七年正月七日に死去したと知られる。従五下。式部権少輔まで昇った。

(31) 儒教の其本文献である五経の一つ。『易経』の称は宋代に始まり、古くは『周易』または『易』という。本来占筮の書であるが、中国古代の王朝である夏に『連山』、殷に『帰蔵』と称する占の書があった。

たといわれ、これらに対し周王朝の易という意味で『周易』と称するという。著者は不明。

(32) 皇侃(四八八〜五四五) 梁の学者

(33) 『論語義疏』は、皇侃(四八八〜五四五)により著された『論語』の注釈書である。十巻から構成されている。本書は、先行する後漢末期から三国魏の何晏(一九〇〜一四九)により編まれた『論語集解』と、晋の江熙の『集解論語』に集成された説などを参考にして、高田の研究によると、日本古代の古典籍のうち、『令集解』・『政事要略』などに引用されていることが明らかになっている(高田宗平『日本古典籍所引『論語義疏』の本文について』『アジア遊学』一四〇号、二〇一一)。また、『台記』康治元年(一一四二)七月八日条に「見始論語皇侃疏」と、二十九日条に「論語皇侃疏、十巻、見了」とあることから、頼長は二十三歳で、わずか二十日間ほどで、読み終えたことが知られる(高橋均『論語義疏の研究』創文社、二〇一三)

(34) 橋本義彦『藤原頼長』吉川弘文館、一九八八

(35) 柳川響『貴族日記と説話―藤原成佐をめぐる二説話と』『台記』早稲田大学大学院文学研究科紀要、第三分冊、二〇一三

(36) 『平家物語』覚一本、巻三法印問答には、平清盛による後白河院鳥羽殿幽閉の前兆として治承三年(一一七九)十一月七日の大地震をみたて、陰陽頭泰親が泣きながら以ての外に火急のことと占文を奏上したとき、「此泰親は清明五代の苗裔をうけて、天文は淵源をきはめ、推条掌をさすが如し。一事もたがはざりければ、さすの神子とぞ申しける。いかづちの落かかりたりしか共、雷火の為に狩衣の袖は焼ながら、其身はつつがもなかりけり。上代にも末代にも、有がたかりし泰親也」とある

(37) 赤澤春彦『鎌倉期官人陰陽師の研究』吉川弘文館、二〇一一

(38) 柳川響『藤原頼長の経学と「君子」観―『台記』を中心として』『国文学研究』第一六九、二〇一三

(39) 成佐の作った都状の分析については、柳川響、藤原成佐の「泰山府

君都状」について、河野貴美子・王勇編『衝突と融合の東アジア文化史』（アジア遊学・一九九号）勉誠出版、二〇一六を参照。

(40) それぞれ生籍・死籍を指すと思われる用語。

(41) 弱冠は『礼記』曲礼上に見える言葉で、男子の二十歳を、または元服して冠をかぶることを言う。頼長は大治五年（一一三〇）四月十九日に十一歳で元服し、その日のうちに正五位下となり、内裏と両院の昇殿、禁色を許されている（柳川、前傾（39））

(42) 輔展は『尚書』顧命からの言葉で、帝王の座の後ろにある屏風を指す。ここでは、誤って元服と同時に昇殿が許されたことを経書の言葉を用いて述べている（柳川、前傾（39））

(43) 眩官は職責を果たさないことを言い、『尚書』皋陶謨を典拠とする（柳川、前傾（39））

(44) 九経は『漢書』芸文志にあるように、易・書・詩・礼・楽・春秋・論語・孝経・小学を指す。（柳川、前傾（39））

(45) 六芸は『周礼』地官・大司徒にもと六種の技芸を指した。しかし、『史記』滑稽列伝に礼・楽・書・詩・易・春秋の六経を指す。いずれも経書を意図しているのである（柳川、前傾（39））

(46) 思齊という語は、『論語』里仁を典拠とする。頼長は自身の性質がたとえ愚かであっても、経学に励むことによって賢人を見習いたいと考えているのである（柳川、前傾（39））

(47) 幼学は『礼記』曲礼上に見える言葉であり、学問を始める年、十歳のことを指している（柳川、前傾（39））

(48) 如在は『論語』八佾に神を祭る時はあたかも神がそこに居るかのようになに敬うことを意味する（柳川、前傾（39））

(49) 惟馨は『尚書』君陳に最高の政治の澄み切った香りは神明を感動させるが、それは神に供える黍や稷が香るのではなく、神を祭る人のすぐれた徳が香るのである。すなわち、明德を以て神を感じさせるような祭祀の様子を表現している（柳川、前傾（39））

(50) 「苟も明信有らば」は『春秋左氏伝』隱公三年伝に見える。たとえ明らかな信が有れば、どのような粗末なものでも神に供えたり王公に

薦めたりすることができるという意味である。これも神に対する頼長の心の誠実さを示す表現として効果的に用いられる（柳川、前傾（39））

(51) 『礼記』竹内照夫訳、中国古典文学大系、平凡社、一九七〇

(52) 『礼記』、前傾（51）

PREMOSELLI GIORGIO（プレモセリ ジョルジヨ）

文学研究科仏教文化専攻博士後期課程）

（指導教員：川内 教彰 教授）

二〇一六年九月三十日受理